

## 「若者、バカ者、よそ者」の支援者になれるか？

多胡秀人  
2017/6/1

「わが故郷の地方銀行のホームページを見たら、地方創生を一所懸命やると宣言していた。地銀といえば預金を集めてカネを貸すものだと思っていたけど、認識不足だった!!□」

友人からの電話。驚きの声が耳に入ってきました。

早速、このX地銀のホームページにアクセスしたところ、確かに地方創生が高らかに謳われていました。まったく、具体性に乏しいイメージ広告のレベルでしたが、、、

X銀行は県の老舗地銀であり、県や主たる市町村の指定金融機関をほぼ総なめにしています。しかるに県屈指の温泉地の支店を数年前に閉鎖し、同温泉地からは撤退しました。製造業が弱く、農業・漁業が主たる産業であり、観光産業を育てていかねばならない県の金庫番なのにずいぶん思い切ったことをするなと半ば呆れたものです。老舗地銀のプライドはどこに行ってしまったのでしょうか。

さて、数年前に観光庁の委員会に関わったことがあるのですが、そこでの議論に地域金融機関が一切参加しておらず、驚きとともに残念に思いました。当時は観光の世界に地域金融機関の存在感がなかったのでしょう。「地域金融機関の意見を議論の中に取り入れていくべきでは」と発言しました。

観光による地域活性化であれば、地域金融機関は旅館ホテルのリノベーションなどにかかわる資金供給のみならず、その気にさえなれば、地元事業者による名物やお土産の創造支援や、自らの持つネットワークを活かした観光客を呼び込む仕掛けづくりなど多面的な活動展開をすることができます。

金融庁など官庁の委員会の議論においては、GDPの7割を占めるサービス業の生産性向上が強く訴えられています。製造業のノウハウを転用することで元気になった旅館ホテルが全国に徐々に広がっていますが、このような製造業とサービス業の橋渡しも地域金融機関の重要な役割です。

ところで、言い古された話ですが、観光も含め、町おこしや地域活性化のリーダーは「若者、バカ者、よそ者」です。かつて、このフレーズを会津若松の歴史ある街並みを蘇らせた方からうかがい、「なるほど」と膝を打ちました。

一方、地域再生の抵抗勢力となるのは、声の大きな町の長老たちであり、彼らの多くは賞味期限切れの事業の経営者と相場が決まっているようです。もちろん例外もあるのですが。

また地方公共団体などの公共セクターの人々も抵抗勢力が優勢です。公共セクターの抵抗勢力の多くは「やりたくない・かわりたくない症候群」であり、表立って若者・バカ者・よそ者の足を引っ張るケースは少ないものの、サボタージュを決め込む傾向にあります。

地域活性化が求められる過疎地では、「夫婦揃って公務員というのが富裕層」という話をよく聞きますが、この富裕層があえて波風を立てることを好まないのはわからないでもありません。

こういう中で「若者、バカ者、よそ者」は貴重な存在であり、地域金融機関による彼らへの支援は非常に重要です。そして、地域金融機関の抵抗勢力どもを黙らせる利害調整能力への期待が高まります。

先日、Z地銀における過疎地の支店長さんたちとの勉強会でもこのことがメイン・テーマとなりました。どこの地域にも地元をなんとかせねばと立ち上がろうとする若手経営者や女性たちがいることと、それを阻もうとする抵抗勢力の存在が赤裸々になりました。その中で支店長さんたちが地域活性化という目的達成のために若者たちを支え、一所懸命に利害調整をされていることに感銘を受けました。

冒頭のX銀行のような地銀はまったくもって論外ですが、金貸しだけで終わっている金融機関が多い中で、Z銀行の支店長さんたちの取り組みは大いに評価されるものです。

お金の貸し手である金融機関は優越的地位の濫用をつねに厳しく問われます。金融行政は財務内容の芳しくない事業者（このような先への融資は管理債権といいます）に対し、貸し手という強い立場を盾に不利益を与える行為を強く戒めています。

実際のところ、抵抗勢力の多くは業況の芳しくない管理債権先です。抵抗勢力は声が大きく、彼らは地元では誰のいうことも聞こうとせず地域再生の障害になるとの話にしばしば遭遇します。このような図式は多くの地域で見られるのではないのでしょうか。

筆者はZ地銀の支店長さんたちに言いました、

「こういう場面で地域金融機関が優越的地位を行使するのはむしろ大歓迎です。」

(了)